

.....

特集：機関リポジトリ-IRからShaRe, Subjectへ

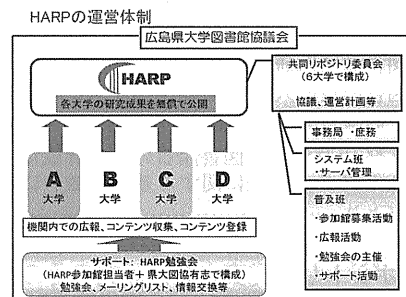
## HARPと私

申請 真弓

.....

機関リポジトリという言葉が聞かれるようになってどれくらい経つだろうか。私個人の感覚としてはここ2、3年で急速に普及したように感じる。また、その中で共同リポジトリという取り組みは、平成20年度CSI委託事業（コンテンツ系）領域2でもプロジェクトが採択されているように（※1）、特に最近になって注目されてきたように思われる。本稿では共同リポジトリの1つであるHARPについてその概要と私個人にもたらした変化を述べる。（※2）

HARPとはHiroshima Associated Repository Portalの略称で、広島県大学図書館協議会加盟館が共同で構築している機関リポジトリのことである。2008年4月30日に運用を開始した。HARPは、広島県大学図書館協議会の事業として正式に承認されており、委員会も設置されている。共同リポジトリ委員会は6大学で構成され、事務局は広島大学が担当し、その他にシステム班と普及班に分かれて運営



を行っている。（図1）共同リポジトリのメリットには経費負担を軽くすることができること、知識の習得や登録作業で協力が得られること、必要な業務を分担して行えることなどがあり、中小規模の大学が機関リポジトリ構築への第一歩を踏み出しやすい条件が揃っていると思われる。システムはオープンソースのソフトウェアであるDSpaceを使用し、サーバ購入などの初期費用はNIIのCSI委託事業費で賄ったため、参加館の参加費は現在のところ年間3万円ということになっている。（注1）

HARPの最大の魅力は、やはり勉強会にあるだろう。運用を開始する約1年半前の10月から広島大学が中心となって勉強会を開催し、参加館の知識の共有や技術の向上を図ってきた。当時、国立大学や一部の私立大学で機関リポジトリが構築され始めていたが、広島県内のほとんどの大学は「機関リポジトリって

何？」という状態であった。もちろん本学も例外ではない。そんな状況の中、すでに県内で機関リポジトリの運営を始めていた広島大学の呼びかけにより、2006年10月に第1回目の勉強会が開催された。その後勉強会を重ねて、皆で知識を共有し、1つずつ課題を解決しながら、運用開始までこぎつけた。運用開始後もこの勉強会は続いている。また、随時発生する疑問や課題の解決にはメーリングリストが活用されている。メーリングリストによって情報の共有や課題のスピーディな解決などが可能になった。今ではHARPメンバーの情報交換の場として欠かせないツールとなっている。

そして、忘れてはならないのが、人の存在である。HARPはこの活動を支援してくれている広島大学の存在なくしては成り立たなかったと言っても過言ではない。また、複数のメンバーが集まることで、様々な得意分野を持った強力な人材が集まり、課題を解決することが可能となっている。これも、メリットの1つだろう。

私は2006年4月に公共図書館から現在の職場へ異動してきた。その時の印象は、「図書館が眠っているようだ」というものだった。大学図書館として様々なサービスを提供していたが、学生や教員と活発なやりとりが行われているようには感じられなかった。私自身、大学図書館員としてのキャリアも全くなく、どうしたものかと考えていた時、ちょうどHARP勉強会の話があった。新規事業に初めから関わることができるということはめったにない経験である。実際のところ、これ以上(色々な意味で)置いて行かれないという藁にもすがりたい思いだった。正直言うと、機関リポジトリに惹かれたのではなく、新規事業ということと他大学と交流ができるという魅力に惹かれたのである。勉強会だし、機関リポジトリって何？と思っていたし、それで他大学と交流できるならこんなありがたい話は

ない、という気楽な感じである。勉強会では機関リポジトリについて多くが学べたと同時に、他大学との距離が縮まって情報収集ができることにより、様々な視点で自分の勤務する図書館や大学を見つめなおすことができた。そして第1回目の勉強会から約2年が過ぎた今では、HARPを核として広島県内だけでなく、日本全国で色々な人と出会い、交流することができている。これはHARPに参加しなければありえなかったことである。(もちろん、ここへ書かせていただくこともなかった)

当館ではHARPの担当は私を含めた2名で、2人とも他の業務との兼任である。特に私は、日ごろ教員や学生と接する機会はほとんどない担当なのだが、HARPによって彼らとの距離が縮まった。学内でHARPの普及活動をするに始まり、教員一人ひとりの研究成果に向き合い、コンテンツを受け取って公開するという一連の作業は、手間はかかるが達成感は大きい。教員の研究がここまで身近に感じられるようになるとは思わなかった。こうやって教員との接触が増えることで教員の潜在意識の中でも図書館が占める部分が多少なりとも大きくなってくれば、やがてHARPから他の業務へと教員の関心も広がる可能性があるかもしれない。そう考えると、私の中では図書館が動き始めたという気がしてくるのである。

また、私自身についても大きな変化があった。教員にHARPや機関リポジトリについて説明を求められる機会が増えれば増えるほど、国内や海外の動向についての情報収集に熱心になり、雑誌やインターネットなどをチェックすることが習慣となっていった。そして驚いたことに、私にとってHARPの業務は全て楽しいのである。特にコンテンツの収集は宝探しに似たところがあって、コンテンツの登録数は宝を手にした数のようにも思える。宝と言うならば、HARPの業務は私や当館に新しい経験や人脈をもたらし、それらは宝にな

っている。今私は、様々な経験と新しい人脈をもたらしたこの「宝」に、当館の他の職員も関わるができるようになればと考えている。

以上、長々と述べてしまったが、これらは私個人の感覚なので、HARPの他の参加館とは多少温度差があるかもしれないということをご了承いただきたい。また、課題もない訳ではない。共同であるがゆえに生じる問題もあるだろう。一方、当館でいうと大学の歴史が浅いため（1994年に開学）、過去の教育研究成果物が少ない。ということは遡及して登録できるものがほとんどないので、コンテンツ数が伸び悩む時期がいずれ来るといった問題があるだろう。しかし、HARPで培った他大学とのつながりや担当者間のチームワークはこれらの課題に対し、乗り越えるだけの力を持っていると信じている。そして、私や当館の世界が広がっていつているように、HARPに登録されたコンテンツの一つひとつが世界へ広がっていくことを祈りたい。

(※1) 平成20年度CSI委託事業領域2プロジェクト一覧

<http://www.nii.ac.jp/irp/rfp/2008/partners.html#ryoiki2>

共同リポジトリ：モデルの構築と普及 (ShaRe : Shared Repository)

<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/share/share.html>

(※2) HARP <http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/>

(図1) HARP 運営体制

(注1) 年間必要経費は、ソフトウェアの保守費と機器更新積み立て費で試算している。この経費を参加大学で按分している。広島県大学図書館協議会からも助成金として3万円支出することになっている。

(なかうけ・まゆみ/

広島市立大学附属図書館)